
日本の行くべき道

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本の行くべき道

【NZコード】

N6196V

【作者名】

零戦

【あらすじ】

今から七十年前の1941年12月8日、日本帝国はアメリカ、イギリスと戦争状態に入った。

大東亜戦争中、多くの日本人が戦死した。

しかし、彼等の他にも日本のため、友のため、愛する人のために戦つた戦乙女がいた。

その戦乙女は艦魂と呼ばれ、一部の関係者しか知られていなかつた。

そしてあの戦いから七十五年が過ぎた2016年、それは神の悪戯なのか、それとも艦魂の宿命なのか、七十五年の時を経て一人の戦乙女の魂は再び艦に生を受けて平成の世に蘇つた。

二人が待ち受ける運命は何のか？そして『』とは？それが知られた時、日本は再びあの激動の歴史を歩むことになる。

二人と『』は日本に勝利をもたらす事が出来るのか？

それは神のみぞ知るのみである。

『不定期更新です』

「ありすじ変更と、内容も変えます」

第一話（前書き）

連載四本ですが、これは不定期更新です。

現代戦はもう一回やつてみたかつてんな。（一回失敗したし）

第一話

「私は此処までだ。』、……日本を……皆を頼む

燃える空母の艦橋で私はあいつと最期の別れをした。

あいつは泣いていた。

私の介護を付き添っていた一隻の駆逐艦から魚雷が一本放たれて私に命中する。

一隻の駆逐艦の艦上にいた乗組員達が私に敬礼をしながら去っていく。

駆逐艦の艦橋で一人の戦乙女が私の最期を看取ってくれた。

もつ思い残す事はない……。

……いや、あいつに好きだと言えなかつた。

私は傷の痛みを堪えながら飛行甲板に寝転がる。

艦橋では一人の将官が自決していた。

既に艦は沈没寸前。

……やまつ黙つべきだつたな。

『『『、また会おう』』』

艦が沈む。

私はそこで暗い闇に飲まれた。

はずだつた。

2016年、夏

私は気がついたら見たこともない軍艦の艦橋にいた。

どうゆう事だ？

私は確かにあのミッドウェー沖で沈んだはずだ。

だが、私は此処にいる。

死後の世界だろうか？

しかし、あれは江田島のはずだ。

見覚えがある。

……まさか此処は呉か？

だが、見渡す限りあの最後に見た呉の町ではない。

艦橋は日本人がいた。

海上自衛隊？

日本海軍ではないのか？

私は艦橋を離れて艦内を歩く。

食堂と思わしき所に着いた。

ふと、視線をテーブルに向けると一冊の雑誌があった。

のらくろー一等兵か？

そういえばよく蒼龍が見ていた。

だが、この雑誌は違っていた。

『海自、新型護衛航空母艦竣工！－！』

そんな見出しだった。

項田をめぐつていくると、私の[写真]が乗つっていた。

『軍の名前を受け継ぐ空母、その名は飛龍！－！』

私の名前だった。

では、この見出しひの空母は……。

私は再び項田をめぐる。

『護衛航空母艦、ミシドウエー海戦でただ一隻孤軍奮闘した空母飛龍の名を受け継いだ』

……私は確かにあの海で死んだみたいだ。

どうやら私は再び艦魂として生まれたようだ』

。

呪いか、それとも運命か？

いや、違う。

それが宿命なんだろうな。

だから、私は再び戦う。

いつの日か、またお前と会える事を祈つてゐる。

なあ、『

』

第一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております（――）

第一話（前書き）

第一話投稿です（・・・、）

「……『、すまねえ。俺はもうすぐ消える』

誰もいない防空指揮所で俺は亥く。

もつ手も足も動かす力も残っていない。

「あいつに会つたのは開戦前だつたなあ……」

飛龍が開戦前の訓練中に、たまたま宴会の部屋に連れて來た。

最初はムカついた。

俺は大艦巨砲主義だつた。

あいつも最初はそつだつた。

けど、時代は流れるんだ。

戦艦が撃ち合つのは日本海海戦で終わつてしまつたんだ。

あいつも戦艦は好きだつた。

でもあいつのパイロットの腕はピカイチだ。

あの戦争で何人の戦乙女やパイロット達が死んだのか……。

最後にあいつに会ったのはいつだろ?……。

解体を待っている伊勢や日向、葛城に会いに行きたいけど、俺はもうすぐ解体が終わってしまう。

もう力が……動く力が出ない。

飛龍や大和も最期はこうだつたんだろうな。

もう思い残す事はない……。

いや……まだある。

あいつに好きだと言えなかつた。

俺は恥ずかしかつた。

今までずつと恋なんてした事がなかつた。

何回、告白の練習した事か……。

俺はいつの間にか涙を流していた。

もう俺は消える。

でもこれだけは言いたい。

「、俺は……お前が好きだ……」

俺の意識はそこで暗い闇に飲まれた。

2016年、吳

気がつくと、俺は見た事もない軍艦の中にいた。

俺は死んだんじゃないのか？

俺は艦内を歩く

軍艦は航行している

俺は胸に手をそろそろ

心臓がドクンドクンと動く。

俺は生きているのか？

軍艦の食堂へと着いた。

食堂の中は懐かしいカレーの匂いがたちこめている。

今日は金曜日なんだもん。

俺はふと、テーブルの上に置かれた雑誌を手に取る。

カラーの写真を見るのは久しぶりだ。

戦争中、米軍が落としたカラーの写真を拾った事があった。

皆、楽しそうに笑っていた。

その雑誌のトップには一隻の軍艦が写っていた。

『新型イージス艦竣工！』

『榛名の名を受け継ぐ艦、蘇る！』

そんな見出しだった。

俺の名前？

項目をめぐると、俺の写真があった。

じゃあ、この軍艦は……。

……悪い。』。

俺はまた艦魂として生まれてしまった。

呪いか、それとも運命か？

いや違う。

それが俺達、艦魂に定められた宿命なんだろ？

『、『、もしお前はこの世にいないだろ？』

何時、会えるかも分からね。

でも会えた時、俺はひさよと叫ぶよ。

俺はお前を愛してるってな。

だから俺はお前と会えるその時まで戦い続ける。

それが艦魂、戦乙女に課せられた使命なんだからな。

セウジだらう。

『

第一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております（――）

第三話（前書き）

え～一部「J都合」なので「Jトーナメント」。

「……遂に、日本も空母を持つたわね……」

四〇の潜水艦桟橋近くに三人の女性がいた。

「姉さん、早くひりゅうに会いに行こうよ」

ツインテールにした黒髪の女性がポーテールの黒髪の女性を急かす。

「はいはい、くらまはせつかちね。いせ、行きましょ

「そうだな

ショートヘアでボーアッシュな女性に声をかけて、三人は光りに包まれた。

ひりゅう飛行甲板

「わあ、大きいなあ」

くらまがはしゃぐ。

「全長は19500t型DDHより七メートル大きい255メートルだからね」

「それに、日本が待ち望んだ初の国産空母だからな、しらね」

いせが女性 しらねの言葉を補足する。

「そうね……、19500t型DDHを諦めてよう巨大にして出来たのがこの35000t型航空護衛艦だからね……」

しらねはひりゅうの艦体に触れる。

ひりゅうは諸外国で表すと、『正規空母』である。

今だに憲法改正をしていないので、正規空母ではなく航空護衛艦になっている。

搭載機は空母艦載機型に改修したF-2C戦闘機二四機、SH-60K哨戒機六機機である。

約三万五千トンにそんなに航空機が入るのか？

F-2Cは翼の半分程から折れ曲がる折り畳み式に改修されているので問題はない。（多分）

兵装は高性能二十ミリ機関砲四基、発展型シースパロー短SAM/アスロックSUM（Mk41 VLS後部24セル）、十二・七ミリ単装機銃等である。

「セヒ、ひりゅうに会いに行きますか」

三人が中に入ろうとした時。

「待て、貴様ら何者だ？」

一人の女性が艦内へ入るドアに現れた。

「誰だてめえは？」

「まず貴様らが名乗るのが当たり前だろ？」「

「な、何だとてめえッ！－！」

いせが怒る。

「まあまあ落ち着きなさい。彼女の言つ通りよ。『めんなさい』
ね、私はしらね型護衛艦一番艦のしらねよ」

「ボクは一番艦のくらまだよ」

「チ、俺はひゅうが型一番艦いせだ」

三人が女性に敬礼する。

「……そつか、くらまどこせは伊勢さんや鞍馬さんの名前を受け継
いでいるのか……」

女性は懐かしそうに言い、そして三人に見事とも言える敬礼をした。

「私は日本帝国海軍航空母艦飛龍だ」

「……日本帝国海軍……」

「……航空母艦……」

「……飛龍だと……？」

三人は啞然とした。

「ふむ、この服は米軍みたいだな。やはり私はこれが一番だ」

飛龍は自衛隊の幹部服を脱ぎ捨て、艦魂の力で旧海軍の将官服を出してそれに着替えた。

「ちょ、貴女何をしているのツー？」

いち早く我に返つたしらねが言つ。

「？」「れが私の服だが？」

「それは旧海軍の将官服よツー！貴女の服は脱ぎ捨てた服よツー！」

「あんなの着てたら心まで米軍になる。あんなの着ていられるか」

飛龍は吐き捨てた。

「お前、頭打つただろ?」

いせが笑う。

「……悪いが頭は打つていない」

飛龍はしらねの額に手を当てる。

「な、何をツー?」

「少し黙れ。私の記憶をお前に見せる」

「ツー?」

「……此処は……」

しらねはいつの間にか見知らぬ空母の飛行甲板にいた。

「あれは零戦ツー? それに九九式艦爆や九七式艦攻までツー?」

飛行甲板には、今や映像や博物館でしか展示されてない零式艦上戦闘機や九九式艦上爆撃機、九七式艦上攻撃機が多数いた。

そして周りには三隻の空母がいた。

「あれは……赤城ツ！？それに加賀ツ！？蒼龍ツ！？」

しらねは驚いた。

「じゃあ……」の空母は飛龍……。それからこの艦隊は南雲艦隊ツ！？」

しらねが絶句している。

その時、見張り員が叫んだ。

「あ、赤城上空に敵急降下アアア――ツ――！」

しらねが反射的に上空を見上げる。

上空には十数機の米海軍ダグラス SBD『ドーントレス』急降下爆撃機が一斉に三空母に向かって急降下を開始した。

ドンドンドンドンドンッ――

ドンドンドンドンドン――

各艦の十二・七センチ連装対空機銃弾が空を赤く飛び回る。われる。

そして一十五ミリ三連装対空機銃弾が空を赤く飛び回る。

数機のドーントレースが直撃弾や機銃弾で撃ち抜かれるが、生き残つ

ていた多数のドーントレースが一斉に搭載していた四百五十キロ爆弾を投下した。

外れた爆弾は虚しく水柱を上げる。

だが、数発の爆弾は吸い込まれるよつて二空母に命中した。

ズガアアアアアアアアーーーンツ！！！

二空母があつとつ間に猛火に包まれた。

格納庫や、飛行甲板に転がつて一百五十キロ爆弾や八百キロ航空魚雷が次々と誘爆したのだ。

「赤城イツ！！加賀アツ！！蒼龍ウツ！！」

乗組員の怒号が響く中、しらねは女性の叫び声を聞いた。

「…………ひりゅうツ…………」

防空指揮所にあのひりゅうがいたのだ。

「…………まさか…………ひりゅうは本當に…………」

しらねがそう呟く時、たれ目で太った将官が飛行甲板に来た。

「これより敵機動部隊に対して反撃を行つツ！！赤城、加賀、蒼龍の弔い合戦だツ！！米軍に飛龍の名を受けたこの龍の牙を見せてやれエツ！！！」

『ウオオオオオオオオ——ツ！——』

そして第一次攻撃隊として零戦と九九式艦爆が発艦する。

「ツ！——頼む、皆を仇を討つてくれツ！——」

飛龍は一機の零戦の右翼に乗つて、一人の青年パイロットに激を飛ばしていた。

「任しどけや飛龍。三人の仇は必ず取るで」

青年はそう言って、発艦した。

零戦と九九式艦爆の第一次攻撃隊が発艦すると、第二次攻撃隊として、零戦と九七式艦攻が発艦する。

「友永隊長、無茶はせんで下さい。片翼の燃料タンクが損傷しどるんです。乗機を変えるか、発艦は止めて下さい」

「大丈夫だ。場所は近いから帰つてこれるぞ」

友永隊長と呼ばれた隊長は部下にそう言って、笑顔で発艦した。

「……今度は薄暮攻撃か……」

「ああ、まあ俺は大丈夫や。さつきもグラマンを四機落としたしな」

しらねは防空指揮所に移動して飛龍と青年の話を聞いていた。

「次も頼むぞ」

「ああ任しどぞ」

一人が笑つたその時、見張り員が叫んだ。

「て、敵急降下アアアツ！－直上オオオ－－ツ－－！」

いつの間にかドーントレースが急降下爆撃を開始していた。

そして、四発の四百五十キロ爆弾が吸い込まれるように飛龍の飛行甲板に命中した。

第二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております（――）

「はッ！？」

しらねは気がつくと、ひりゅうの艦内にいた。

「姉さんどうしたの？」

しらねの行動に不審に思つたくらまがしらねに話しかける。

「（……今は……それに時間は全く経っていない……）」

「見たか？」

ひりゅうが問い合わせる。

「……ええ、貴女が旧海軍の空母飛龍の艦魂である事は分かつたわ」

「し、しらねッ！？お前まで何を言つてるんだッ！？」

「いせ、事情は後で説明するわ。ひりゅう……いえ、飛龍。貴女は何故また艦魂として生まれたの？」

「……分からん。確かにあの時、私はミッドウェーで赤城達と死んだはずだ。だが、気づけば此処にいた……というわけだ」

「……分からぬわね」

「ああ……」

しらねと飛龍が黙り込み、くらまといせは完璧においてけぼりを食らっていたのは間違いなかつた。

「……何を言つてゐんだろう……」

「……俺が知るか……」

その時、航空機の爆音が響いた。

洋上迷彩をした一機のF-2Cが、哨戒飛行から帰つてきた。

「一〇九一、震電一、哨戒飛行を終えた。着艦許可を求む」

『了解。着艦許可を認める』

一機のF-2Cは着艦した。

一人のパイロットがF-2Cから降りる。

整備員が一機に群がり、エレベーターで格納庫まで下げる。

一人は艦橋に向かい、ひりゅう艦長の加来弘一佐に報告をした。

「只今、哨戒飛行から帰還しました」

「つむ、任務」」苦労だ」

二人は艦橋を出る。

「あ～疲れたあ～」

「何でや？」

「あんたとあるから」

「俺の田の前で壊つたなよ紫電」

女性パイロットの面葉に男性パイロットは溜め息をばく。

「全く、昔からちうなんやから」

「いいじやない零。これが私なんだから」

「まあやつやな」

男性パイロット 東雲零三尉は答える。

女性パイロット 川西紫電二尉はふうとため息を吐く。

「それにしても、海面に入ったと思つたらいつこの間にか海面の空母パイロットだもんね～」

「まあやつはつなや紫電。ロシアや韓国、北朝鮮、中国を抑えるためにこいつが必要やねんからな」

零は艦体を触る。

「……よひやく、日本も戦う力が持てたんや。文句を書つなんよ」

「やうだね」

紫電は頷く。

「ん? 誰だろあれ」

紫電が指差す先にはしらね達がいた。

「おー、お前ら誰や?」

突然言われた言葉にしらね達は固まつた。

『この一人は艦魂が見えるのか?』

いち早く我に返つたのはひりゅうだった。

「ああ、誰だろ?」

ひりゅうはフツと笑う。

「あのな、」ひづけ質問しつむねん

男性パイロットは溜め息をつく。

「まあまあ落ち着きなよ零」

女性パイロットが男性パイロット 零を落ち着かせる。

「それで所属は何処なの？あ、もしかして迷子（笑）？」

「いや、迷子ではない。私達は……艦魂だ」

ひりゅうが言ひ。

「……艦魂……」

零が呟く。

その時、零は炎上した空母の防空指揮所にいた。

「……え？」

そして、零の目の前には艦魂と言つた女性 ひりゅうが血の海に中に入った。

「……。私は……」今までだ 日本を……頼む……

零は思わず叫んだ。

「飛龍ッ！！」

「な、何だ？」

「…………え？」

気がつくと、零はひじゅうの艦内にいた。

「…………夢…………か？」

零は呟く。

「零て夢遊病あつたけ？」

紫電がツツコミを入れる。

「いやないわ

「あ、いたツ……東雲ツ……」

「何や坂井？」

零の同僚である坂井三郎二尉が走ってきた。

「じ……自衛隊が……」

「何やねん坂井。自衛隊がどいつしてん？」

坂井は息を整えて、衝撃的な発言をした。

「自衛隊が日本から無くなるんだッ！！」

その瞬間、その場にいた人間全員が固まつた。

第四話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております（――）

第五話（改）（前書き）

修正投稿です。

問題の部分は削除して、ひりゅうとはなの説明が無かつたので増やしました。

「都合」の部分は武器輸出三原則、F-X、憲法改正です。

この度はいろいろの認識不足で多くの読者様に不愉快な気分にさせてしまつた事に真に申し訳ありませんでした m(_ _) m

第五話（改）

日本の政権を握っているのは2012年から再び政権の座に着いた自民党である。

前政権の民主党は菅直人元首相のよく分からない政治態勢に「じゅうじや」となり、国民の信頼はどん底だった。

菅元首相が辞任する際の支持率は僅か5・4%と前代未聞の数字であつた。

新たに首相になつた自民党総裁の渕垣は、東日本大震災で被災した海岸線地域の瓦礫撤去の補佐として東北地方の陸上自衛隊の部隊を投入した。

渕垣は失業者や震災で職を失つた者には自衛隊への入隊を促した。

また、自衛隊の入隊試験の一部緩和もした。

更には、震災地域の者が入隊した場合を無条件でその震災地域の駐屯地の配属とさせた。

衣食住が完璧である自衛隊の入隊には失業者達は歓喜を上げながら入隊した。

財務省が「自衛隊に入れすぎだ」と発言したが、渓垣は発言した人物を次々と更迭して黙らせた。

さらに、渓垣は国會議員の給料削減を提案した。

議員の給料三分の一をカットにしてその分を被災地や他の資金に回すのだ。

これには民主党が反発したが、無理矢理通した。

これは国民にウケ、渓垣の支持率は上がった。

環境問題として渓垣は2030年までに原発は縮小して太陽光等の新エネルギーと石油等の火力発電を中心としたエネルギー政策を発表した。

更には、新エネルギー源としてメタンハイドレートの大規模開発を決定。

コストを抑えるため今まで南海トラフでやっていた事業を日本海側へと移転させた。

またスパイ防止法を制定した。

主な取り締まりは産業スパイや軍事スパイの取り締まりである。（逮捕者は民主党議員もいた）

また、軍事面にも力を入れた。

陸自の人数を三十万まで増やし、10式戦車等を増強した。

海自も新型の音響測量艦とはやぶさ型//サイル艇の増強をした。

むりわめ型はむりわめ型護衛艦、たかなみ型護衛艦とあきづき型護衛艦の増強を決定した。

むりわめ型は総勢16隻、たかなみ型は総勢12隻、あきづき型は6隻に変更した。

また、新型大型護衛艦としてはるな型護衛艦の建造中である。

武装等は後ほどこ語り。

さらには、航空護衛艦（後のひりゅう）も建造中である。（はるな型とひりゅうは2016年に竣工した）

武器輸出三原則も大幅に緩和して最古参のはつゆき型の半数は退役して、タイや台湾などに売却された。

空自はF-15Jを主力としつつ、F-Xはコーロファイタータイフーンに決定した。

築城基地のF-2の飛行隊を空母に搭載するために四十機程度の生産を七十機（復座型も含めて）程度に増やした。

渢垣はこれだけをすると、自民党総裁の満期が終了したために内閣を総辞職した。

そして自民党総裁選の結果、年齢56歳の長谷川勝が新たな自民党総裁になった。

首相官邸

長谷川は官邸に備えつけられたテレビを見ながら妻からの弁当を食べていた。

「や、総理ッ！…」

秘書が慌てて入ってきた。

「どうしたのかね？」「

卵焼きを食べている長谷川が言つ。

「は、はい。相変わらず中国と韓国、北朝鮮から抗議文が来ていま
す」

「『空母は保有するな』とか？」

「はい」

「……あの三国は何を考えているんだ？空母は防衛用として配備す
るんだ。内政干渉だろ？」

「はあ。それと、民主党や社民党から『空母を廃棄しろ。憲法九条
廃止をするな』と口に口に強く言っています」

長谷川は秘書の言葉に一ヤリと笑う。

「奴ら、国会は既に大半が自民党議員が占めているのよく聞えるな」

「ヤリですね」

長谷川は再び、弁当を食べはじめた。

長谷川は通常国会中に憲法九条廃止を提出しており、今のところは長谷川の計画通りである。

三日後、長谷川の法案は両院とも通過して国民の承認を得るため、国民投票が行われた。

そして、国民投票の結果、憲法九条廃止の賛成は八十%となり、天皇陛下は公布した。

そして、長谷川は自衛隊を日本国防軍に改名させた。

これに対し、中国や韓国、北朝鮮の三国のメディアは「ヤリて『日本の帝国主義が復活』『日帝が復活』など放送した。

第五話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております。――

第六話（前書き）

久しぶりの更新。

F-Xはとうとうタイフーン、F/A
18E/F、F35に絞
られた。

どうなんのやN……。

青い大空の中を俺は零戦に乗っていた。

ああ……またこの夢なんか……。

『飛行隊長。2時の方向が呉です』

2時の方向は黒煙があがつっていた。

「……糞ッ！呉市民の敵討ちやッ！『飛行隊長ッ！太陽から
グラマン来ますッ！』全機散開やッ！…」

ダダダダダダダダッ！…

太陽からグラマンが急降下攻撃をかけてきた。

ズガアアアンッ！…

『隊長ッ！高橋がやられましたッ！…』

『全機グラマンには構うなッ！…攻撃目標はヘルダイバーとアベン
チヤーやッ！…』

『了解ッ！…』

そして零戦一六機はヘルキャットの攻撃をかわして、乱戦となつて
いの上空へ突入した。

「起きたか。メシだぞ」

「……ああ」

Hプロン姿の金髪の女性に礼を言いつつ、零はパジャマから着替えてリビングに向かう。

「お早う零」

「お早うございます鹿さん」

リビングのテーブルで、新聞を読んでいたハゲの男性に挨拶をする。

「何だ? 飛燕に起きられたのか?」

「ちやーますよ。またあの夢を見てたんですよ」

「……突撃か?」

「はー。また3円19円のです」

「……前世のお前はそこで死んだのか?」

「さあ、それは分かりません。多分生き残っていたんじゃないですか？」

「ハツハツハ。お前のよつた奴は長生きしそうだからな」

虎は愉快そうに笑い、新聞に目を移す。

「しかし……また厄介だな韓国は……」

「ええ。対馬で海保の巡視船が韓国の違法漁船を拿捕したようですから」

「そして、韓国は漁船の乗員を解放せよ……か」

「何を言つてゐんですかねえ」

「人が話していると、ぞろぞろと恐そつた面をした男達が来た。

「社長、零さんお早びござります」

「おうお早う

「お早うやな

二人は挨拶を返す。

「メシが出来たぞ」

そこへ、Hプロン姿の金髪女性

飛燕が朝食を持ってきた。

『頂きます』

合計で十人の人間が朝食を取る。

「紫電はまだ寝てるのか？」

「ああ。昨日は夜中までヒースコンバットをしてたらしいからな」

「F-2のパイロットなのにヒースコンバットかよ……」

零の言葉に虎や組員達は苦笑した。

「あいつのメシは毎からでいいだろ?」

味噌汁を啜る飛燕が言つ。

そろそろ虎達の自己紹介をしよう。

藤堂影虎。

彼は藤堂警備会社の社長である。

だが、警備会社でもただの警備会社ではない。

この警備会社の創設は1945年8月であった。

これは初代社長が関係していた。

初代社長は戦時中は海軍軍人として戦場にいた。

終戦後、彼は日本人を守りきれなかつた事を悔やんで、せめての償いとして警備会社で民間人を守ろうとしたのだ。

会社は元軍人や失業者などを引き入れて、会社の勢力を拡大して今
の会社は大阪市内のある警備まで任されるようになつた。

無論、これは大阪府警も知つてゐるが、別に問題はない。

むしろ、盗みをしようとした十数組のヤクザや在日韓国人を捕縛し
て警察の手錠をかけさせてもらつてゐるからである。

今では、警備会社は西日本ベストテンに入る警備会社になり、ホー
ムレスだつた男や退職した自衛隊員もいる。

しかし、警備会社にヤクザからの報復があつた。

紫電は一代目社長藤堂影虎の一人娘であつた。

ちなみに性が違つのは有名な警備会社の娘だからと虐められないよ
うに、母親の性を名乗つてゐる。

零の一家は藤堂家の隣でよく零も紫電と遊んでいた。

それを、零も藤堂の息子と勘違いし、報復に来たヤクザは零の両親
を殺害してまつたのだ。

それ以来、零は藤堂家でお世話になつてゐる。

飛燕も似たような事である。

飛燕は日本人の父親とドイツ人の母親との間に生まれたハーフである。

飛燕の一家も報復に巻き込まれ、飛燕の両親は殺害されてしまった。

藤堂は飛燕を引き取り、立派に成長させるのが自分に課せられた義務と思って今日まで至るのだ。

三人は何の因果かは知らないが自衛隊に入り、三人共F 2のパイロットになつたのであつた。

「ん、もう時間やな。 そろそろ行きますわ」

朝食を食べた零が言つ。

「紫電はいいのか?」

「……忘れてた……」

そして、零は紫電を叩き起しして、家族に見送られながら家を出た。

第六話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております（――）

第七話（前書き）

第五話の改訂を出しました。

2018年、7月10日対馬沖

『やーこの韓国漁船に警告する。貴船は日本の領海内で違法漁業をしている。直ちに停戦せよ』

2015年に竣工した最新型の巡視船せと、やさひが、ながらは先程から対馬沖で違法漁業をしている韓国の漁船四隻に対し、警告を促してくる。

しかし、四隻は巡視船の警告を無視して普通に漁業をしている。

「船長、警告射撃の許可を願います」

せとの航海長が言つ。

「ひむ」

5分後に返答が来た。

「船長、第七管区より通信です。警告射撃を許可するとのことです

「よし、これより警告射撃を行つ」

せとは拡声器で警告射撃を行つと警告放送してからRFDS付きの一

十一ノコ多銃身機関砲と同じくRFJ付きの四十一ノコ多銃身機関砲が上空と海面に向かつて威嚇射撃をする。

四隻の韓国漁船はよつやく停戦をした。

「わい、逮捕するか。これで何度目だ？」

せとの船長はそう呟いた。

首相官邸

「長谷川総理。韓国大使より、漁船の乗組員を釈放と対馬を返しろと言っています」

「理由は？」

「は、聞きましたら対馬は韓国の領土である。なので日本は乗組員の釈放と対馬を返還しようと……」

「拒否すると伝える」

長谷川はただ一言、それを言った。

「分かりました」

秘書は長谷川に頭を下げて部屋を出る。

「…………」

長谷川は無言で誰かにメールを打つた。

呉基地

「全艦出港ッ！…！」

第四艦隊司令官南雲忠少将の命令のもと、呉基地の第四艦隊が出港する。

第四艦隊の陣容は旗艦ひりゅうを筆頭にして、第四戦隊いせ、はたかぜ、はまぎり、うみぎりで、第八戦隊きりしま、いなづま、さみだれ、さざなみが第一航空戦隊のひりゅうを守るよつに輪形陣を組む。

その外側には、呉地方隊の護衛艦せとゆき、あぶくま、せんだい、とねが航行をしている。

「司令官。目的地は本当に対馬で？」

参謀長の田下が尋ねる。

「ああ。とっても、韓国軍の出方を押さえたためだ」

対馬には陸海空の部隊がいる。

陸軍は一個連隊。

海軍は対馬地方隊としてはつをやまね、まつをや、あわをきが対馬の港に停泊している。

空軍はレーダー基地と警務隊である。

「何もなければいい。奴らはひつゆうてはえていればいいんだ。そうしたら我々も何もしない」

南雲はそう言って、前方の海面を見つめた。

しかし、韓国は第四艦隊が対馬に停泊中は何もしてこなかった。

四

吳に一隻の軍艦が入港してきた。

その軍艦は川崎重工業船舶海洋カンパニーの神戸工場で作られた。

武装は前後にあたご型やいんご型より大型の連装主砲を搭載している。

前部には連装砲一基、後部に一基である。

そして、両舷には六一口径七六ミリ単装速射砲が合わせて一基あつた。

「…………あれが新型のイージス巡洋艦ね」

その軍艦を只に停泊する護衛艦しらねの甲板からしらねが見ていた。しらねとくらまはこのイージス巡洋艦と引き換えに只で解体する予定であった。

しかし、何の運命かは知らないがしらねとくらまは延命措置を取られて、函館に新しく新設される第五艦隊に所属する事になった。

検討地としては青森の大湊基地も候補にあつたが、平館海峡で潜水艦による奇襲攻撃を受ける可能性もあつたので函館に決定したのだ。

新型イージス巡洋艦は桟橋に接舷した。

「さて、新しい艦魂に会いに行くわよ」

「了解だよ」

二人は転移をした。

イージス巡洋艦はるな甲板

「へえ～。これが一・十・三センチ連装砲か～」

くらまが前部一基にある一・十・三センチ連装砲を眺めていた。

「排水量は一万九千トン。他の護衛艦や駆逐艦よりも装甲を厚くして一、一発のハープーンでも沈みはしないわ」

しらねも誇りしげに一・十・三センチ連装砲を見ていた。

「……それでも、俺は三十五・六センチ連装砲を搭載してほしかったな。三十五・六センチ連装砲は俺にとつても馴染み深いからな」

突然、後ろからの言葉にしらねが振り向く。

そこには旧海軍の将官服を着ている女性がいた。

第七話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております（――）

第八話（前書き）

次回から一気に戦争に行きます。

「……貴女は？」

しりねは若干驚きながらも女性に尋ねた。

「これは失礼したな」

女性はさう言つてしらね達に見事な敬礼をした。

「日本帝国海軍連合艦隊所属、元第三戦隊に所属していた戦艦榛名の艦魂の榛名だ」

イージス巡洋艦はるな 榛名はさう言つてニヤリと笑つた。

空母ひりゅう

「……」

ひりゅうは飛行甲板で棧橋近くの道路を見ていた。

「空母は解体ッ！？」

「日本国防軍は解散ツ！－！」

「軍国だツ－－！」

道路上には百人程の市民団体が集まって、ひりゅうに向かつて叫んでいた。

「…………」

ひりゅうはそれをただ見ているしか出来なかつた。

「あれは自称平和団体や」

「ツ－？」

突然の声に後ろを振り返ると、飛行服を着た零がいた。

「また会つたな」

零はひりゅうにやたら叫んだ。

「やはり貴様とあの女は私が見えるか？」

「ああ。艦魂とか言つあれやう。ネットの小説で話題になつてゐるな」

「やうか……」

ひりゅうはそつと見て再び平和団体を見る。

「あんま見んとさ。あんなん見てたら『気持ち悪いなつてくるわ』

「…………これが今の日本人なのか？」

「一部やな一部

零は一部を強調する。

「あれは日教組と左翼のせいであなつたんや。全く、今の日本はどうなつてんねん……」

零が溜め息を吐いた。市民団体は相変わらず叫んでいた。

「…………私達がアメリカと開戦したせいだらつか…………」

「それは分からん。でも、アジア解放のために戦つたのは事実とちやうか？まあ陸軍の占領政策が悪かつたのも原因ぢやうか」

「ちうか…………」

ひりゅうはいつまでも言つて帽子を取る。

ひりゅうのポニー・テールにした髪が風で靡く。

「…………（あれ…………）ればどつかで見たよつな…………」

そう零が思つた時、何かの映像が脳内に流れた。

『何を見ている？』

『いやなこ、飛龍の髪をな

『ば……馬鹿……』

ひりゅうひと零が何処かの空母の防空指揮所で話しをしていた。

『シ……てめえなに飛龍の髪を見ているんだシ……！』

セイヘイ飛龍と同じ将官服を着たショートヘアの女性が現れた。

『何やねん榛名っ？ただ単に髪を見てただけやんか

『うるせえシ……！』

『……こ……』

「え？」

「零、ビビった？」

ひりゅうの呼びかけに零が気がつく。

「あ……ああ。大丈夫や。」

「風邪か？」

「多分やつやろ（氣のせいやうな……）」

零はそう呟付けた。

「戦艦榛名の…………」

「艦魂…………」

しきりねとくらまが交互に囁く。

「ああそつだ。俺はイージス巡洋艦さるの艦魂と同時に戦艦榛名の艦魂だ」

「せうなのね…………」

「何があまつに反応は無いな?」

「だつて、船と船の前にもそつぱつた手がいるしね」

「な、何だとシ一?」

くへりせの葉にまぶるなは驚いた。

「俺の他にも旧軍艦艇の艦魂がいるのかツ!?

「い、いるから手を離してや~

はなはなはくらまの肩に手をとつぱりしていた。

「わ、悪い。で、誰だそいつは？」

「つここないだ竣工したばかりの航空護衛艦ひつゆ」

「なッ！？」

今度はじりねの言葉にはるなは驚く。

「ひ、飛龍がいるのかッ！？」

「やうよ。艦はあれよ」

「あれだなッ！？」

じりねは場所を教えると、さるなは直ぐさま艦魂特有の力である
転移移動をした。

「くえ、此処がひつゆの部屋か」

「まあ何にもないわね」

「それを囁つな

零と紫電はひつゆの部屋を訪れていた。

部屋はベッドと机に椅子、それと箪笥しかなかった。

「コスプレとか置いてないの？」

「あるわけないだろ！」

紫電の言葉にひりゅうは溜め息を吐いた。

「てか、女の子やねんから何か買つたらどうせ？」

「さうは言つても我々艦魂は陸上の活動は出来ないからな」

「せうか……。なら俺達が何か買つてきてやるわ」

「せうせう！」

「…………ありがとう…………」

一人の言葉にひりゅうは笑つた。

「飛龍ッ！」

その時、ショートヘアで旧軍の服を着た女性が転移をしてきた。

「…………榛名？」

「飛龍ッ！」

女性 榛名は飛龍の姿を見ると抱き着いた。

「よかつた……生きてたんだな……」

「榛名…………」

「俺も…………再び艦魂として蘇ったんだ。イージス巡洋艦はるなとしうな」

そして、これで役者は揃つたのであった。

第八話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしています m (—) m

第九話（前書き）

お騒がせしました m () m

8月1日、総理官邸

「暑いなあ石羽さん」

「ああ、今年の夏も暑いよ長谷川君」

総理官邸で首相の長谷川と防衛大臣の石羽繁は将棋をしていた。

「石羽さん。ひりゅう型空母の一一番艦の竣工はいつ頃になりますか？」

「……極秘だが予定を前倒しにして竣工している。今は乗組員が慣熟訓練をしている」

「そうですか……。搭載する航空機は？」

「三沢基地のF-2だな。三菱が必死にF-2Cへ改造している。それが二十機の一個飛行隊、それとSH-60K哨戒機三機だ。F-2パイロットはひりゅうで練習している。練度は八十%くらいだ」

石羽はそう言つてお茶を飲む。

「出来るだけ早く戦力化は出来ないですか？」

「……やはり中国か？」

「…………」

石羽の問い掛けに長谷川は無言で頷く。

「つい先日、劉備型通常空母の一一番艦劉備と二番艦孫權が竣工しました」

「……それに旧ソ連の空母ヴァリアーグ……長城が既に稼動している」

「はい。ですが、劉備型はまだ二隻が建造中です」

「一般公開での名前は曹操、孫策、張遼となっている」

「……とつあえずは中国と韓国の動向を見守りましょ」

「つむ」

石羽が頷く。

「ついでえ、AH-64Dの艦載機型はどうなってますか？」

「既に陸自のヘリパイロットが海自のヘリパイロットに操作の仕方を教えている。練度は五十くらいだろ」

石羽がお茶を飲む。

十三機で調達が終了したAH-64D戦闘ヘリコプターはひゅう

が型ヘリ空母（ヘリ空母に名称を変更した）に四機ずつ計八機を二隻に搭載する事が決定した。

残りの五機は予備扱いとなり、霞ヶ浦駐屯地に配属されている。

ちなみに、AH-1S対戦車ヘリコプターの後継機はOH-1観測ヘリコプターの重武装型に決定された。

武装は三十ミリ機関砲、七十ミリロケット弾、ヘルファイアミサイル等を搭載するようにしている。

調達予定は百一十機となっている。

「じいりで石羽さん。F-3の開発はどうなっていますか？」

長谷川が醤油煎餅の袋を開けながら言ひ。

「大分順調に育つてきているな」

F-3は実験検証機心神の飛行データ等を参考にして国産を目指している第五世代戦闘機である。

国防省はF-3の費用はかなり出している。

「と云つても採用はまだ先だな。二十年以降だら」

石羽は苦笑する。

ちなみにF-3は艦載機型も検討している。

「そ、総理ツ……」

その時、秘書が慌ただしく入ってきた。

「何だ？」

「は、はい。中国の漁船監視船が尖閣諸島付近にあります

「……またか。それで今はどくなっているんだ？」

長谷川はつとさりするように秘書に聞いた。

「はい。領海内を行つたり離れたりしています」

「……沖縄に地方隊を設立してから急に活発になつてきたな……」

石羽が呟く。

沖縄には海軍の新地方隊が設立されて、はるさめ型護衛艦の追加で建造されたしらつゆ、うみかぜ、やまかぜの三隻がいた。（佐世保地方隊の沖縄基地隊は沖縄地方隊の配属となつた）

また、対馬には特例としてはつゆき型護衛艦が駐留している。

更に沖縄方面関連では、宮古列島にある下地島の下地島空港を軍民共用化にして、築城基地のF-15J飛行隊を配備している。（このため築城基地は全てタイフーンの部隊で形成されている）

「……ロシアの動きはどうなっていますか？」

長谷川は秘書を下がらせた後、石羽にそう聞く。

「去年の演習以来、まだ何もないな」

ロシアは北方領土は我が国の領土とするために毎年、ウラジオストクのロシア海軍に演習があつたが、今年はまだない。

国防の観点から海軍の函館基地に第五艦隊と北海道地方隊（はるさめ型護衛艦のみねぐも、あさぐも、あさぎり型護衛艦のせとぎりが配備されている）を今年から新設して、ロシアの動きを牽制している。

「日本の周りは脅威だらけだな……」

長谷川はそう呟いた。

外ではクマゼニが鳴き、気温も二十五度を越えていた。

第九話（後書き）

アパッチはひゅうが型に搭載しましたがおおすみ型にも搭載した方がいいですかね？

それが米軍から強襲揚陸艦を借りるか……。

御意見や御感想等お待ちしています m (—) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6196v/>

日本の行くべき道

2011年10月30日10時13分発行